

## 浙遊日記

●崇禎九（一六三六）年九月一九日～一〇月一六日、二八日間 徐霞客五一歳

### ●訳注稿

#### 第一部 江陰から杭州府治を経て金華へ（九月十九日～十月五日、十七日間）

##### 「九月十九日」

\*概要…これは序文に相当する。知人と別れの宴を開き、夜に自宅を出発し、船で無錫に向かう。

徐霞客の生家は、明の南直隸常州府江陰県馬鎮にあつた。今は江蘇省無錫地級市江陰市馬鎮鎮にあたる。馬鎮とは、急行便を伝達する中継所が置かれていたことに由来するといふ。「陸軍図・青陽鎮」「陸軍五十万図・通州」に、江陰の南端で無錫との境界に沿つて「馬鎮」の名が見え、BDやGEでも「馬鎮村」が確認できる。徐霞客の生家はここから西北に二く三キロメートルの朱家浜あたりで、今は徐霞客記念館が建てられている。水路や池が広がる典型的な江南の水郷である。「何平一九九九」に訪問報告があり、訳者も二度訪問した（中国旅行記）。

### ■本文の部

丙子九月十九日 余久擬西遊、遷延二載。老病將至、必難再遲。欲候黃石齋先生一晤、而石翁杳無音至。欲與仲昭兄把袂而別、而仲兄又不南來。昨晚趨晤仲昭兄於土瀆莊。今日爲出門計、適杜若叔至。飲至子夜、乘醉放舟。同行者爲靜聞師。

### ■訳注の部

#### ●訓訳

丙子の九月十九日 余久しく西遊を擬するも、遷延すること二載なり。老病將に至らんとし、必ず再遲すること難しとす。黃石齋先生を候ひて一たび晤はんと欲するも、而も石翁杳として音の至る無し。仲昭兄と袂を把りて別れんと欲するに、而も仲兄又た南來せず。昨晚趨りて仲昭兄に土瀆莊にて晤ふ。今日門を出づるの計をなすも、適々杜若叔至る。飲みて子夜に至る。醉に乗じて舟を放つ。同行せる者は靜聞師たり。

#### ●語注

○丙子 崇禎九年、西曆一六三九年にあたる。  
○黃石齋先生 黃道周（一五八五～一六四六年）。福建省漳浦の人。明末の文人政治家で、学行ともにすぐれていたが、剛直なためしばしば左遷された。明朝滅亡後も抵抗運動を続けたが、敗れ刑死した。崇禎元年（一六三二）から徐霞客と交友を始め、ともに山に遊び、詩歌を交わした。崇禎十三年（一六四三）に北京で投獄された黃道周へ、西南遊から戻ったばかりの徐霞客が「遊記」を贈り、なぐさめたという。両者の交友については、「河内

一九八九」に詳しい。

○仲昭 名は遵湯。徐霞客の族兄で、万曆十一年（一五八三）生。「遊天台山日記 後」などを残した、崇禎五年（一六三二）の浙江遊に同道した。「鄭一九九四」に記述がある。

○靜聞 江陰県迎福寺の僧侶。徐霞客と天台山に遊んだ蓮舟上人は彼の師匠にあたる。長い西南遊を徐霞客とともにしたが、客死した。

### ●口語訳

丙子の年

### 《序、旅立ち》

〔南直隸府常州府江陰県域〕

〔九月十九日〕

私がかねてより西南への旅行を志していたが、延び延びになって二年が過ぎてしまった。老いや病いがしのびよりつつあり、このまま先延ばしにすることは難しいと考えた。黄齋齋先生が来てくれて会うのを待っていたが、先生からの音信は全くない。族兄の徐仲昭と別れの挨拶をしようと思うのだが、彼も南からここへやって来ない。そこで昨晚、土瀆莊へ赴いて彼に会った。今日出発する計画だったが、ちょうど杜若叔父が尋ねてきた。一緒に夜中まで酒を酌み交わす。酔いのままに舟に乗り出発する。同行は靜聞禪師である。

◆江陰から無錫への船中泊。

〔九月二十日〕

\*概要…無錫へ至り、知人と別れの宴。無錫で船中泊。

### ■本文の部

二十日 天未明、抵錫邑。比曉、先令人知會王孝先、自往看王受時、已他出。即過看王忠紉。忠紉留酌至午、而孝先至、已而受時亦歸。余已醉、復同孝先酌於受時處。孝先以顧東曙家書附囊中。「時東署爲蒼梧道。其乃郎伯昌所寄也。」飲至深夜、乃入舟。

### ■訳注の部

#### ●訓訳

二十日 天未だ明けざるに、錫邑に抵る。曉の比ころほひ、先づ人をして王孝先に知會せしめ、自らは往きて王受時を看みんとするも、已に他出かれでたり。即ち過りて王忠紉を見る。忠紉留めて酌し午に至る。而して孝先至り、已にして受時も亦た歸る。余已に酔ふも、復た孝先と共に受時の處に酌す。孝先 顧東曙の家書を以て囊中に附す。「時に東署 蒼梧道たり。其れ乃ち郎の伯昌の寄する所なり。」飲むこと深夜に至り、乃ち舟に入る。

#### ●語注

○錫邑 無錫。明代は常州府に属した県。県城は今の無錫地級市崇安区の西部あたり。江陰からは北門からの入城となる。

○顧東署 「粵西遊日記二」七月二十七日条に「蒼梧顧東署「名應場」、余錫邑人也」とある。これ以外に情報はない。

○蒼梧道 蒼梧は広西省の地名。道は行政区画。ここではその長官を指す。

### ●口語訳

《1》蘇州へ

〔南直隸常州府無錫県域〕

〔二十日〕

空がまだ明けないうちに、無錫県城に着く。明け方くらいに、先ず人をやって王孝先に通知させ、自分は王受時に会いに行ったが、彼はもう外出していた。そこですぐに王忠紉のところを訪ねる。王忠紉は私を引き留め、ともに酒を酌み交わして午の時に至った。そこへ王孝先がやって来て、ほどなく受時も帰って来た。私はとくに酔っていたが、更にまた王孝先と一緒に王受時のところへ行って酒を酌み交わす。王孝先は顧東署の家族への手紙を私に託す。「自注1」深夜まで飲み、やっと舟に入る。

◆無錫で船中泊。

〔自注1〕当時東署は、蒼梧道で長官をしていた。その手紙は、息子の顧伯昌が寄託したものである。

〔九月二十一日〕

\*概要…無錫から船で蘇州へ。蘇州府呉県泊。

### ■本文の部

二十一日 入看孝先、復小酌。上午發舟、暮過虎丘、泊於半塘。

### ■訳注の部

#### ●訓訳

二十一日 入りて孝先を看、復た小酌す。上午に舟を發し、暮に虎丘を過ぎ、半塘に泊す。

#### ●語注

○發舟 無錫から蘇州へは、いわゆる大運河、今の京杭運河を通ったのであろう。

○虎丘 蘇州市の北部にある高さ三十餘あまりの小山。春秋時代呉王の夫差が父の闔閭を葬った場所と伝え、その後寺院が数多く建てられた。西北から蘇州へ入る場合のランドマークをなしていた。白居易が蘇州刺史時代にたびたび訪れたが、虎丘の前を通る運河（塘河）を開削させ、そばに堤防（今の山塘街）を築かせている。今は閶門外山塘街という区画に位置する。明代は蘇州は蘇州府呉江県であった。

○半塘 不詳。山塘街の半ばの場所か。

●口語訳

〔二十一日〕

再び無錫県城に入って王孝先に会い、再び少しばかり酒を酌み交わす。

〔南直隸蘇州府常熟県域〕

〔同〕 吳県・長州県域〕

午前に船を出発させ、暮れには蘇州の虎丘を通り過ぎ、半塘に泊まる。

◆蘇州に泊。

〔九月二十二日〕

\*概要…蘇州で知人と別れの宴。蘇州府吳県泊。

■本文の部

二十二日 早爲仲昭市竹椅於半塘。午過看文文老乃郎、并買物閶門。晚過葑門看含暉兄。一見輒涕淚交頤。不覺爲之惻然。蓋含暉遁跡吳門且十五年、余與仲昭屢訪之。雖播遷之餘、繼以家蕩子死、猶能風騷自遣。而茲則大異於前。以其孫之剝削無已、而繼之以逆也。因復同小酌余舟、爲余作與諸楚璵書。「諸爲橫州守。」夜半乃別。

■訳注の部

●訓訳

二十二日 早に仲昭のために竹椅を半塘に市かふ。

午過ぎ文文老の郎を看んとし、並びに物を閶門かに買ふ。

晩過ぎ葑門にて含暉兄を看る。一見するや輒ち涕淚交々頤す。覺えず之がために惻然たり。蓋し含暉は跡を吳門に遁せること且に十五年ならんとし、余と仲昭と屢々之を訪ふ。播遷の餘なりと雖も、繼ぐに家蕩し子死するを以てし、猶ほ能く風騷して自ら遣る。而して茲に則ち大いに前に異なる。其の孫の剝削して已む無く、而も之に繼ぐに逆を以てするなり。因りて復た同に余が舟に小酌す。余がために諸楚璵に与ふるの書を作す。「諸は横州の守たり。」夜半にして乃ち別る。

●語注

○閶門 蘇州城の西側の一番北にある門。

○葑門 蘇州城の東側の一番南の門。

○吳門 蘇州のこと。

○播遷 遠方をさすらうこと。

○風騷 詩経国風や楚辞離騷。詩文を作って楽しむこと。

○剝削 すねかじり。

○諸楚璵 「粵西遊日記 二」八月十五日條に「横州……時州守爲吾郡諸楚餘〔名士翹〕」とあるが、これ以外の情報はない。

○横州 今の広西壮族自治区南寧地級市横県。

●口語訳

《2》蘇州

〔二十二日〕

早朝に仲昭のために半塘で竹の椅子を買う。

昼過ぎに文文老の息子に会いに行き、あわせて閻門で買物をする。

晩に葑門に含暉兄に会いに行く。顔を合わせるやいなや、彼は泣き出し、涙が顔中をおおった。私は思わず憐憫の情に駆られた。思うに、含暉はこの蘇州の地に隠棲すること一五年になろうとしており、私と仲昭とでしばしば訪ねたものであった。故郷を離れてさすらい、更に家は破産し子どもも死んでしまったのだが、それでもなお詩文を楽しんで悲しみを慰めていた。それがここに至って以前とは異なることになっていた。孫が彼から無心をするこやまず、加えて逆らい悖るといふ不孝者となったからである。そこでまた私の小舟まで一緒に戻り、少し酒を酌み交わす。彼は私のために諸楚璵への手紙を書いてくれた。「自注1」夜半になって含暉と別れた。

◆蘇州呉県泊。

〔自注1〕諸は横州の長官であった。

〔九月二十三日〕

\*概要…蘇州呉県から船出。同崑山県を經由して、青洋江と呉淞江との合流地点で船中泊。

■本文の部

二十三日 復至閻門、取染紬裱帖。上午發舟。七十里、晚至崑山。又十餘里、出内村、下青洋江。絶江而渡、泊於江東之小橋渡側。

■訳注の部

●訓訳

二十三日 復た閻門に至り、染紬裱帖を取る。

上午に舟を發す。

七十里にして、晩に崑山に至る。

又た十餘里にして、内村を出で、青洋江を下る。江を絶して渡り、江東の小橋渡の側に泊す。

●語注

○發舟 蘇州から崑山へは、婁江を通ったのであろう。婁江は太湖を東に出、崑山・太湖をへて、劉河口で海に入る。

○崑山 今の江蘇省蘇州地級市崑山市。蘇州から真東に約三十浬。明代は蘇州府崑山県。

秦漢時代の婁県。

○青洋江 今の青陽港か。港は港湾ではなく、小河川。崑山市で婁江と吳淞江とを結ぶ。

○江 吳淞江か。吳淞江は太湖を東に出、上海へ至って海に入る。婁江の南側で平行して東流する。

●口語訳

〔二十三日〕

再び閶門に行き、染色を依頼していた紬と表装を依頼していた書帖を受け取る。

午前中に船を出発させる。

《3》《余山へ》

東に七十里進み、晩に崑山県に至る。

〔南直隸蘇州府崑山県域〕

また十里あまりで、内村に出、青洋江を南へ下る。(吳淞江への入り口に着き) 江を横切って渡り、東岸の小さな橋の傍に泊まる。

◆青洋江と吳淞江の合流地点あたりで船中泊。

〔九月二十四日〕

\*概要…船旅。松江府青浦県を經由して、同余山に陳繼儒を訪ねる。引き留められて泊南へ真つ直ぐ向かわずに、東に寄り道しているのは、彼を訪ねるのが目的だったのだろう。

■本文の部

二十四日 五鼓行。二十里、至綠葭浜、天始明。午過青浦。下午抵余山北。因與靜聞登陸、取道山中之塔凹而南。先過一壞圃、則八年前中秋歌舞之地。所謂施子野之別墅也。是年、子野繡圃徵歌甫就。眉公同余過訪、極其妖豔。不三年、余同長卿過、復尋其勝、則人亡琴在、已有易主之感。「已售兵郎王念生。」而今則斷樹零垣。三頓而三改其觀、滄桑之變如此。越塔凹、則寺已無門、惟大鐘猶懸樹間、而山南徐氏別墅亦已轉屬。因急趨眉公頑仙廬。眉公遠望客至、先趨避。詢知余、復出、挽手入林。飲至深夜。余欲別、眉公欲爲余作一書寄雞足二僧。「一號弘辯、一號安仁。」強爲少留、遂不發舟。

■訳注の部

●訓訳

二十四日 五鼓に行く。

二十里にして、綠葭浜に至り、天始めて明く。

午に青浦を過ぐ。

下午に余山の北に抵る。因って靜聞と陸に登り、道を山中の塔凹に取りて南す。先づ一の壞せる圃を過ぐれば、則ち八年前の中秋に歌舞するの地なり。所謂「施子野の別墅」なり。是の年、子野 繡圃にて歌甫を徵して就かしむ。眉公余と共に過ぎり訪ね、其の妖豔を極めたり。三年ならずして、余長卿と共に過り、復た其の勝を尋ぬれば、則ち人亡く琴

のみ在り、已に易主の感有り。「已に兵郎の王念生に售る。」而るに今は則ち斷榭零垣たり。三たび頓して三たび其の觀を改む。滄桑の變 此くの如し。塔凹を越ゆれば、則ち寺已に門無く、惟だ大鐘のみ猶ほ樹間に懸かる。而して山南の徐氏の別墅も亦た已に轉屬せり。因りて急ぎて眉公の頑仙廬に趨る。眉公客の至るを遠望し、先づ趨りて避く。詢ひて余なるを知り、復た出で、手を挽きて林に入る。飲みて深夜に至る。余別れんと欲するに、眉公 余がために一書を作して雞足の二僧に寄す。「一は弘辯と號し、一は安仁と號す。」強ひて少留をなす、遂に舟を發せず。

●語注

○五鼓 午前四時ごろ。明け前。

○行 青洋港と吳淞江の合流地点から、吳淞江を下っているのであろう。

○綠葭浜 今の崑山市陸家鎮。明代は崑山縣葭葭濱鎮。「陸軍図・葭葭濱鎮」に、青洋港との合流地点から吳淞江を少し下ったところに葭葭濱鎮があり、「陸軍五十万図・上海」も同じ。朱惠榮には「今は綠葭という」とあるが、BDでは陸家浜、GEや「現代地図・蘇」では陸家鎮とする。

○青浦 今の上海市青浦区青浦鎮。明代は松江府下の県。明の嘉靖二十一年（一五四二）設置。綠葭浜からしばらく吳淞江を下り、安亭鎮のあたりで、南に入る二本の水路が延びている。このうち西南に下るものが青浦に至る。「陸軍図」では東大盈浦、BDや現代地図では東大盈港とする。おそらく徐霞客はこの水路を南下して、青浦に至ったのである。

○余山 今の上海市松江区余山鎮にある小山。明代は松江府華亭県内。「讀史紀要」南直松江府婁県に「府北二十五里、相傳有余姓者隱此、故名」という。名勝の地で、現在も余山国家遊覽度暇区となっている。青浦から余山までも水路がある。

○八年前 崇禎元年（一六二八）。この年徐霞客は、福建から羅浮山に遊んでいる。その折の日記が「閩遊日記 前」であるが、その記述は、四月五日までで終わっており、余山を訪ねた記録はない。本条に中秋に訪ねたとあれば、福建からの帰途に立ち寄ったのであろうか。

○繡 華麗な、華美な。

○甫 男性。歌甫で歌手の意か。

○眉公 陳繼儒（一五五八〜一六三九）。松江花亭の人。字は仲醇。終始在野の人であり続けたが、博覽強記、詩書画にもすぐれた。やがて崑山、余山に隱棲し、世人との交わりを極力避け、しばしば詔勅もて召されるも、病と称して辞退した。「明史」卷二百九十八本伝。しかし徐霞客とは懇切な交わりを持った。初めて会ったのは、天啓四年（一六二四）で、母親を伴って江蘇を遊んだ折り（記は残されていない）のようである。そのとき、徐霞客が八十歳になる母親の長寿を言祝ぐ文章を依頼したところ、陳繼儒は快く承知し、「寿江陰徐太君王孺八十叙」を著した（いま、徐霞客の故居にある「晴山堂石刻」に収録されている）。また徐霞客に「霞客」の号をつけたのも、陳繼儒であった。鄭祖安に記事がある。宋の謝翱に「金華遊記」があるが、その版のひとつとして「陳眉公訂正金華遊錄一卷」がある。

○不三年 徐霞客は崇禎三年（一六三〇）に再び福建を訪ねている。その折の日記が「閩

遊日記「後」である。そこにはこの地を訪ねた記録はないが、おそらくこの往復のいずれかに立ち寄ったのであろう。

○人亡琴在 「朱恵榮」は「却物是人非」と訳す。施設や設備はもとのままあるが、そこに住む人が風雅を解さない人に変わってしまった、ということか。

○滄桑之變 滄海（海原）がいつしか変じて桑田になること。世の移り変わりの激しいことのととえ。

○先趨避 時に眉公は八十一歳。人嫌いが益々高じていたのであろう。

○雞足 雲南の寺院で、今回の西南遊の目的地のひとつ。

○弘辯・安仁 雞足山の僧で浙江の出身。

### ●口語訳

〔二十四日〕

夜明け前に出発する。

二十里進み、綠葭浜に至ったところで、やっと夜が明ける。

〔南直隸松江府青浦県域〕

正午ごろ、松江府青浦県城を過ぎる。

〔同 華亭県域〕

午後に婁県の余山の北に到着する。そこから静聞とともに上陸し、山中の塔凹の道を選んで南へ進む。最初にひとつの荒れ果てた園庭の側を通り過ぎる。ここは八年前の中秋節に歌舞をしたところである。いわゆる「施子野の別荘」である。この年、子野は美しい園庭に歌手を召し出した。陳眉公は私と一緒にここを訪ね、妖艶な宴を楽しんだのであった。その後三年たたないうちに、私は長卿と一緒にここを訪ね、再びその景勝を尋ねようとしたが、施設設備は残っていたが、住む人は風雅を解する人ではなくなっており、つまらないものになってしまっていた。もはや持ち主が替わったかの感があった。「自注1」そして今は壊れた台と崩れた垣が残るばかり。三度訪れて、三度その姿を変えている。滄桑の變というが、全くその通りだ。塔凹を越えると、寺があるが、門がもはや無くなっている。ただ大きな鐘が、木々の間に懸けられているばかりである。そして山の南側にあった徐氏の別荘も、持ち主が替わっている。そこで（心配になって）急いで眉公の頑仙廬へと足を急がせる。眉公は客が来るのを遠くから眺めると、先ずは走って家の中に逃げ、避けようとした。ところが、人に問うて、客が私であることが分かると、再び家から出てきて、私の手を引いて林に入る。ともに酒を飲み、深夜に至った。私は暇を告げようとしたが、眉公は私のために雞足山の二人の僧侶「自注2」に手紙を書いてくれることとなり、もう少し留まるよう、強く求めた。そこで舟を出すことができなかった。

### ◆余山泊。

〔自注1〕 実際兵部侍郎の王念生という者の手に渡っていた。

〔自注2〕 名は弘弁と安仁。



「九月二十五日」

\*概要…余山を辞し、船で西南へ。蘇州府長州県章練塘を經由し、浙江嘉興府嘉善県へ入り、泊。

■本文の部

二十五日 清晨、眉公已爲余作二僧書、且修以儀。復留早膳、爲書王忠紉乃堂壽詩二紙、又以紅香米寫經大士饋余。上午始行。蓋前猶東迂之道、而至是爲西行之始也。三里、過仁山。又西北三里、過天馬山。又西三里、過橫山。又西二里、過小崑山。又西三里、入泖湖、絶流而西、掠泖寺而過。寺在中流、重臺傑閣、方浮屠五層、輝映層波、亦澤國之一勝也。西入慶安橋、十里、爲章練塘。「其地爲長洲南境、亦萬家之市也。」又西十里、爲蔣家灣、已屬嘉善。貪晚行、爲聽蟹群舟所驚、亟入丁家宅而泊。「在嘉善北三十六里、即尚書改亭公之故里。」

■訳注の部

●訓訳

二十五日 清晨、眉公已に余がために二僧の書を作す。且つ修むるに儀を以てす。復た留めて早膳す。王忠紉の堂の壽の詩二紙を書すをなし、又た紅香米を以て經と大士を寫して余に饋る。

上午 始めて行く。蓋し前は猶ほ東迂の道にして、而して是に至りて西行の始まりとなす。

三里にして、仁山を過ぐ。

又た西北に三里にして、天馬山を過ぐ。

又た西に三里にして、橫山を過ぐ。

又た西に二里にして、小崑山を過ぐ。

又た西に三里にして、泖湖に入り、流れを絶して西し、泖寺を掠めて過ぐ。寺は中流に在り、重臺傑閣、方に浮屠の五層にして、層波に輝映す。亦た澤國の一勝なり。

西して慶安橋に入る。

十里にして、章練塘たり。「其の地は長洲の南境たり、亦た萬家の市なり。」

又た西に十里にして、蔣家灣たり、已に嘉善に屬す。

晩を食して行かんとし、聽蟹群舟の驚する所となる、亟に丁家宅に入りて泊す。「嘉善の北三十六里に在り、即ち尚書改亭公の故里なり。」

●語注

○清晨 早朝。

○儀 礼物。

○紅香米 不詳。黄珣は血だとする。血を顔料として仏画を描いたのか。

○大士 ここでは仏や菩薩。それを描いた仏画。

○仁山 朱惠榮は、今の辰山のことという。辰山は上海市松江区の集落、ならびに小山。「現代地図・江浙滬」では、余山から辰山塘という運河を南に下ったところにある。

○天馬山 今の上海市松江區にある小山。標高九八<sup>八</sup>という。「讀史紀要」松江府婁縣では、府の西北二五里、崑山の東北にある横雲山が、「一名天馬山」とする。

○横山 「陸軍五十万図・上海」に見え、「現代地図・江浙滬」によれば、天馬山から小崑山を経由する小河川が横山塘とある。

○小崑山 「陸軍五十万図・上海」に見え、現在の上海市松江區にある。

○御湖 今は御河といい、淀山湖から出て東南に流れ、諸水を受け入れながら黄浦江に注いで海に入る。松江區と青浦區の境をなす。「讀史紀要」松江府に見える。

○御寺 不詳だが、BDや「現代地図・江浙滬」によれば、御河に中洲があり、そこに御塔があるという。「陸軍図十万分一・上海」には、中洲の寺として澄照寺の名が見える。このことか。

○方 朱恵栄は方形とする。

○章練塘 今の上海市青浦區練塘鎮。明代では、蘇州府長洲縣に属した。「讀史紀要」浙江嘉興府嘉善縣に「章練塘、縣東北四十五里」とあり、「太平寰宇記」の、嘗て呉の孫權がここで戦艦を建造し、旗を張り巡らせて水練をした。のちに張が章となまり、章練となつた、という説を載せる。「陸軍図・章練塘」「陸軍五十万図・上海」に章練塘鎮があり、GE

・BD・「現代地図・江浙滬」では練塘。

○長洲 蘇州府長洲縣。

○蔣家灣 今の浙江省嘉興地級市嘉善縣の盛家灣か。明代は浙江嘉興府嘉善縣。「全省輿図・嘉善上」には施家灣が、BDには蔣灣が、「現代地図・浙1」には盛家灣とある。

○聽蟹群舟 不詳。漢語大詞典に「蟹浪」の語を載せ、「謂捕蟹者紛集似浪潮。極言其多」とする。たくさん集まってくる様を言う。これによれば、蟹を捕ろうとしている程たくさん集まつた舟、ということか。

○丁家宅 今の嘉善縣丁柵か。「全省輿図・嘉善上」に丁家柵鎮が見え、BDでは沈香湯の側に丁柵鎮が見え、「現代地図・浙1」には丁柵の名が見える。GEでは何家路のあたりとなる。

## ●口語訳

〔二十五日〕

早朝、眉公はもう、私のために二人の僧侶への手紙を書いてくれていた。更に礼物を私に調べてくれた。また引き留めて朝ご飯を振る舞ってくれる。さらに王忠紉の母親の長寿を祝う詩を二枚の紙に書いてくれ、加えて紅香米を使ってお経と仏画を描いて私に贈ってくれた。

午前に、やっと出発する。思うに、これまでは東へと迂回する道のりであり、ここからが西へ向かう旅の始まりである。

《4》杭州へ

三里で、仁山を過ぎる。

さらに西北に三里で天馬山を過ぎる。

さらに西に三里で横山を過ぎる。

さらに西に二里で小崑山を過ぎる。

さらに西に三里で御湖に入り、河を西に横切り、御寺のそばを掠めて進む。寺は川の中

州に立ち、重なりあつて高く聳える台閣を誇り、まさしく五層の仏塔であり、層をなす波の光と映え合っている。これまた水郷の景勝地であるといえよう。

西に慶安橋をくぐる。

十里で章練塘である。「自注1」

〔浙江嘉興府嘉善県域〕

さらに西に十里で蔣家灣である。ここは既に嘉興府嘉善県である。

夜を押して行こうとしたが、群集する舟を驚かせてしまった。そこで速やかに丁家宅で泊まることとする。「自注2」

◆蔣家灣に泊。

〔自注1〕ここは長洲県の南の境で、ここもまた一万戸の大商業都市である。

〔自注2〕ここは嘉善県の北に三十五里の地にあつて、とりもなおさず尚書の改亭公の故郷である。

〔九月二十六日〕

\*概要…船で西南へ。一旦蘇州府長洲県に入つて瀾溪に入り、南西に向かつてすぐに嘉興府秀水県へ。烏鎮の手前で船中泊。

■本文の部

二十六日 過二蕩、十五里爲西塘、亦大鎮也。天始明。西十里爲下圩蕩、又南過二蕩、西五里爲唐母村、始有桑。又西南十三里爲王江涇、其市愈盛。直西二十餘里、出瀾溪之中。西南十里爲前馬頭。又十里爲師姑橋。又八里、日尚未薄崦嵫。而計程去烏鎮尚二十里、戒於菑苻、泊於十八里橋北之吳店村浜。「其地屬吳江。」

■訳注の部

●訓訳

二十六日 二蕩を過ぎ、十五里にして西塘たり、亦た大鎮なり。天始めて明く。

西に十里にして下圩蕩たり。

又た南に二蕩を過ぐ。

西に五里にして唐母村たり、始めて桑有り。

又た西南に十三里にして王江涇たり、其の市 愈々盛んなり。

直ちに西すること二十餘里にして、瀾溪の中に出づ。

西南に十里にして前馬頭たり。

又た十里にして師姑橋たり。

又た八里にして、日尚ほ未だ崦嵫に薄らず<sup>せま</sup>。而るに程を計るに烏鎮を去ること尚ほ二十里あり。菑苻に戒し、十八里橋の北の吳店村浜に泊す。「其の地 吳江に屬す。」

●語注

- 二蕩 蕩は沼沢。「全省輿図・嘉善上」では、丁家柵鎮から西塘に至る間には、北祥府蕩・中祥府蕩・南祥府蕩の三つが並んでいる。
- 西塘 今嘉善県にある集落。水郷古鎮として観光地化されている。明代は、嘉善県内。「全省輿図・嘉善上」「陸軍五十万図・上海」・BD・GEに西塘鎮がある。「浙江地名」西塘鎮の項では、「嘉慶嘉善県志」から「民居稠密、向成市廛、木郷貿易者萃焉」と引く。
- 下圩蕩 池沼だろうが不詳。「全省輿図・嘉善県上」に北夏墓蕩・南夏墓蕩があり、BD・「現代地図・浙」には夏墓蕩がある。あるいはここか。
- 唐母村 「全省輿図・秀水上」に陶墓塘があり、BDには陶母が見える。
- 王江涇 今は嘉興地級市秀州区の、京杭運河の支流の西岸にある。蘇州府呉江県に隣接する。明代は秀水県。「読史紀要」嘉興府嘉興県に「王江涇、府北三十里。相傳以王江二姓居此而名。今爲運河所經、曰王江涇市、有巡司」とある。「全省輿図・秀水上」「陸軍五十万図・上海」に王江涇鎮、BDに王江涇村、GEに王江涇鎮とある。
- 直西 王江涇から西に直進すると、一旦府境をまたいで蘇州府呉江県に入ることになる。
- 瀾溪 「読史紀要」嘉興府桐郷県に瀾溪をあげ、「縣北二十里」とする。北側の京杭運河を指すか。「全省輿図・秀水県上」には、浙江省と江蘇省との境をなす運河を瀾溪塘と表記する。なお、ここから烏鎮あたりまで、運河の右岸が江蘇省、左岸が浙江省となる。
- 前馬頭 朱惠榮は今の錢碼頭で、嘉興市西北隅にあるとする。今は秀州区に属す。明代では秀水県。BD・「現代地図・浙2」にもその名が見える。
- 師姑橋 朱惠榮は今の思古橋で、嘉興市の西北隅にあるとする。所属は錢碼頭と同じ。
- 「陸軍五十万図・上海」に「師古港」、GE・「現代地図・浙2」に思古橋、BDには思古橋村の名が見える。
- 崦嵫 伝説上の西方にある山。太陽が沈む山とされる。
- 烏鎮 今も同じ名。嘉興地級市桐郷県に属し、古鎮游覧の代表格。明代は桐郷県に属す。「浙江地名」に烏鎮鎮があり、地名の考察をして、唐代から烏鎮と呼ばれたとする。古代からの交通の要衝であり、人口も多く、明李樂が「重建浙直分署碑記」に「姑蘇留都之前戸、嘉湖浙甸之後屏」と述べたことを引く。
- 崔苻 元は春秋時代鄭国にあった沼沢（左伝昭公二十年条）。盜賊がそこに潜み、人を攫ったことから、盜賊・泥棒を指す語となった。
- 十八里橋 不詳。九里橋の名は「全省輿図・桐郷上」、「現代地図」に見える。
- 呉店村浜 不詳。BD・GEには胡店村の名が見える。九里橋村から更に東北に位置する。
- 呉江 明代の呉江県で蘇州府に属した。

#### ●口語訳

〔二十六日〕

二つの沼沢を過ぎ、十五里で西塘である。ここも亦た大きな鎮である。ここで夜が明けた。

西に十里で下圩蕩である。

さらに南に二つの沼沢を過ぎる。

西に五里で唐母村である、ここで初めて桑があった。

さらに西南に十三里で、王江涇である、この市はたいそう盛んである。

ここから真つ直ぐ西に二十里ほど進み、(一旦蘇州府吳県に入つて) 瀾溪に出る。  
(瀾溪を) 西南に十里進むと前馬頭である。

さらに十里で師姑橋である。

さらに八里行くが、まだ太陽は沈んではいない。しかしここから烏鎮まではまだ二十里はある。盜賊に遇うのを警戒し、十八里橋の北の吳店村浜に泊まることとする。「自注1」  
◆吳店に泊。

「自注1」ここは吳江県に属す。

「九月二十七日」

\*概要…船旅。烏鎮・徳清県新市を経て、曹村で泊。

#### ■本文の部

二十七日 平明行。二十里抵烏鎮。入叩程尚甫。尚甫方遊虎埠、兩郎出晤。捐橐中資、酬其昔年書價。遂行。西南十八里、連市。又十八里、寒山橋。又十八里、新市。又十五里、曹村、未晩而泊。

#### ■訳注の部

##### ●訓訳

二十七日 平明に行く。

二十里にして烏鎮に抵る。入りて程尚甫を叩く。尚甫は方に虎埠に遊び、兩郎出でて晤る。橐中の資を捐し、其の昔年の書價に酬ゆ、遂に行く。

西南に十八里にして、連市たり。

又た十八里にして、寒山橋たり。

又た十八里にして、新市たり。

又た十五里にして、曹村たり、未だ晩ならざるも泊す。

##### ●語注

○平明 夜明け。

○西南 京杭運河は、烏鎮の南で分かれる。そのまま南へ下るのが白馬塘といい、西へ折れるのが運河の本流。

○連市 今の湖州地級市南潯区練市鎮。明代は湖州府歸安県内。「全省輿図・歸安県左」 「陸軍五十万図・上海」に連市鎮があり、BD・GE・「現代地図・浙1」では練市鎮とある。京杭運河沿いの町で、「地名簡志」に練市鎮があり、朝市が早いことを伝える。

○寒山橋 今の含山か。南潯区内で、明代は歸安県内。京杭運河沿いの町で、湖州市南潯区の南端、徳清県との境に位置する。「全省輿図・歸安県左」に含山・含山市、「同・歸安県中」に含山塘があり、BD・GE・「現代地図・浙1」では含山・含村がある。

○新市 今の湖州市徳清県新市鎮。明代は湖州府徳清県内。「読史紀要」湖州府徳清県に

新市鎮がある。「全省輿図・徳清県」に新市鎮があり、「陸軍図・新市鎮」「陸軍五十万図・上海」にも見える。「浙江地名」にも新市鎮があり、水陸の要衝で商業が盛んで、かつては「小上海」と呼ばれたこともあったという。

○曹村 「陸軍図・新市鎮」「同十万人分一・崇徳県」に新市鎮の西南の運河沿いに曹村の名が見える。他の地図には見えない。ここから南に折れて南下すると唐棲に至る。

### ●口語訳

〔二十七日〕

夜明けに出発する。

〔浙江嘉興府桐郷県域〕

二十里で烏鎮に至る。舟を降り、町に入って程尚甫を訪ねる。(ところが) 彼はちやうど虎埠に遊覧に出かけていて留守であり、二人の息子が出てきて挨拶してくれる。持参した金銭を渡し、この数年間に借りていた書籍代を返した。かくして出発した。

〔浙江湖州府安県域〕

西南に十八里で、連市である。

さらに十八里で、寒山橋である。

〔浙江湖州府徳清県域〕

さらに十八里で、新市である。

さらに十五里で、曹村である。まだ晩には間があつたが、泊まることとした。

### ◆曹村に泊。

〔九月二十八日〕

\*概要…船旅。杭州府内の唐棲を経て、昼には杭州府城に着く。手紙を書くなどし、西湖の北で船中泊。

### ■本文の部

二十八日 南行二十五里、至唐棲。風甚利。五十里、入北新關。又七里、抵櫻木場。甫過午。令僮子入杭城、往曹木上解元家、詢黃石翁行旆。猶未北至。時木上亦往南雍、無從訊。因作書舟中、投其家、爲返舟計。此後行蹤修阻、無便鴻也。晚過昭慶、復宿於舟。

### ●訓訳

二十八日 南に行くこと二十五里にして、唐棲に至る、風 甚だ利なり。  
五十里にして、北新關に入る。

又た七里にして、櫻木場に抵る。甫わづかに午を過ぐ。僮子をして杭城に入り、曹木上解元の家に往き、黃石翁の行旆を詢はしむ。猶ほ未だ北に至らず。時に木上も亦た南雍に往き、よりに訊ふ無し。因りて書を舟中になし、其の家に投じ、舟に返すの計をなすなり。此の後 行蹤修阻にして、便鴻なければなり。晩に昭慶を過よぎり、復た舟に宿す。

●語注

○唐樓 今の杭州地級市余杭区塘棲。明代は杭州府仁和県内。「全省輿図・仁和県上」に唐棲鎮があり「陸軍図・塘棲鎮」にもその名が見え、「陸軍五十万図・上海」には塘棲鎮が見える。京杭運河沿いの町で、「地名簡志」では、「四郊の産品が集積する交通の要衝で、枇杷を産することでも有名という。

○五十里 この水路は定かではないが、「全省輿図・仁和県水路道里記」に、新開運河「亦名下唐河」があり、「塘棲鎮↓武林渡↓横涇橋↓圖子橋↓北新橋」のルートを載せる。

○北新関 「読史紀要」浙江杭州府仁和県に、「北新関、府北十里、商旅輳集之道也。有戸部分司駐此、權商稅也」とある。「全省輿図・仁和県下」「同・錢塘県上」の新橋、あるいは北新橋か。

○榿木場 「陸軍図・杭県城」に松木場の名が見える。今の西湖北岸の保俶北路あたりだろうが、BDには保俶北路の東側に「松木場河東」という道路が見える。杭州城外北部にあった小集落だったのだろう。

○解元 科挙の郷試で第一位の人。宋代以降は読書人の尊称として用いられる。

○行旆 旆は燕尾や旗が垂れ下がった様。行跡。

○南雍 明代に南京に儲けられていた大学（辟雍）の国子監。

○便鴻 鴻は書信。人に託して運んでもらう手紙。

○昭慶 昭慶寺。九三六年、呉越王の創建と伝え、宋の太平興国年間に大昭慶寺の題を賜った。杭州西湖北岸の寺院で、戦後まもなく中国で出版された地図までは記載されているが、現存せず、今の少年宮がそれであるという。「鈴木一九九七」に報告がある。「明錢塘県志」（紀制）に「昭慶寺、在錢塘門外。晉天福間建」とある。

●口語訳

〔二十八日〕

〔浙江杭州府仁和県域〕

南に二五里行くと、杭州府仁和県の唐棲に至る。風向きが舟行に便であった。五十里で、北新関に入る。

さらに七里で錢塘県の榿木場に至る。わずかに昼を過ぎたところである。私は召使いを遣って杭州城に入城させ、曹木上君のところへ行つて黄石翁（道周）の行跡を尋ねさせた。しかし彼はまだ南から来ていなかった。当時木上自身も、南京に国子監として出ており、石翁の行跡を問うすべもなかった。そこで船中で手紙を書いて、曹木上の家に投じ、返事は舟に返してもらおう手立てを取った。それはこの後、私の行く先は遙か遠くとなり、手紙を届けてもらうのも難しくなるからである。

晩に昭慶寺を訪問し、舟に戻って泊まった。

◆杭州に泊。

〔九月二十九日〕

\*概要…杭州城外で手紙を書く。前日と同じく船中泊。

■本文の部

二十九日 復作寄仲昭兄與陳木叔全公書。靜聞往遊淨慈・吳山。是日復宿於舟。

■訳注の部

●訓訳

二十九日 復た仲昭兄と陳木叔全公とに寄するの書を作す。靜聞往きて淨慈・吳山に遊ぶ。是の日 復た舟に宿す。

●語注

○陳木叔全公 陳函輝（一五九〇～一六四六）。木叔は字で、自らは小寒山子と称した。浙江臨海県の人で、崇禎七年（一六三四）の進士。徐霞客とは親友であった。一六三二年の雁宕山遊からの帰途に仲昭とともに訪ねて意気投合した。後にも交友は続き、徐霞客没後は彼のために「徐霞客墓誌銘」を撰している。陳函輝自身は、清軍に台州を占領されたのち、自縊した。

○淨慈 淨慈寺。西湖南岸の南屏山北麓にある仏教寺院で、五代後周顯徳元年（九五四）創建の古刹。「鈴木一九九七」に報告がある。「明錢塘県志」（紀制）には「淨慈寺、在南屏山。周顯徳元年建」とある。

○吳山 西湖の東南岸の小山。海拔百メートル程度だが、紫陽山などのいくつかの峯からなり、各山上には楼閣などが建てられていて、西湖や錢塘江を眺める景勝の地。

●口語訳

《5》杭州

〔二十九日〕

仲昭兄と陳木叔に手紙を書いた。靜聞君は淨慈寺と吳山に遊びに行った。この日も、舟に泊まった。

◆杭州に泊。

〔九月三十日〕

\*概要…杭州城内で旅の準備の買い物など。西湖北岸の昭慶寺に泊。

■本文の部

三十日 早入城。市參寄歸。午下舟、省行李之重者付歸。余同靜聞渡湖入湧金門、市銅炊・竹筒諸行具。晚從朝天門趨昭慶、浴而宿焉。是日復借湛融師銀十兩、以益遊資。

■訳注の部

●訓訳

三十日 早に城に入る。參を市ひて寄せ歸らしむ。



午 舟に下り、行李の重き者を省きて付し歸らしむ。余は靜聞と同一湖を渡りて湧金門に入り、銅炊・竹筒の諸行具を市ふ。

晩に朝天門より昭慶に趨り、浴して焉に宿す。

是の日 復た湛融師に銀十兩を借り、以て遊資を益す。

### ●語注

○市參寄歸 朱惠榮はこの文を「買了些參託人捎回家」と訳す。前日したためた手紙を自宅へ届けてくれる人を捜して、有料で依頼したということか。

○下舟 「舟に下る」とよみ、乗船する、意と解す。朱惠榮は「回到船中」と訳す。

○湧金門 西湖東岸のクリークの一つへの入り口。今の湧金路西口。ここから西に西湖大道が杭州駅まで伸びている。杭州市城の大通りの一つをなす。

○朝天門 南宋時代の臨安の皇宮前の大道にあった門。当時はこの大道の南端が皇宮であった。南宋代・明代の地図では確認でき、湧金門から城内へ入ってから大道を南にややつた所に見える。朱惠榮は中山路の北段にあたるという。

### ●口語訳

[三十日]

早朝に城内に入り、手紙を自宅へ届けてくれる人を傭い、寄託した。

お昼に、一旦船に戻り、荷物のうち重たくかさばるもの（余山で陳眉公から贈られた仏画などであろうか）を選び分け、自宅へ送る手配をする。私はといえば、靜聞君とともに西湖を渡り、湧金門から城内に入って銅の炊飯俱（鍋）や飲料水を入れる竹筒などの旅の諸道具を購入した。

晩になり、朝天門から昭慶寺まで歩いて戻り、そこで入浴して泊まることとする。

この日はまた湛融師から十兩の銀を借り、旅費の足しとすることができた。

◆杭州に泊。

[十月一日]

\*概要…靜聞とともに西湖北岸から西岸の諸山を散策。

### ■本文の部

十月初一日 晴爽殊甚、而西北風頗厲。余同靜聞登寶石山巔。巨石堆架者爲落星石。西峯突石尤岌嶮。南望湖光江影、北眺臯亭・德清諸山、東瞰杭城萬竈。靡不歴歴。下山五里、過岳王墳。十里、至飛來峯。飯於市、即入峯下諸洞。大約其峯自楓木嶺東來、屏列靈隱之前、至此峯盡骨露。石皆嵌空玲瓏。駢列三洞。洞俱透漏穿錯、不作深杳之状。昔黥於楊髡之刊鑿、今苦於遊丐之喧汚。而是時獨諸丐寂然。山間石爽、毫無聲聞之溷、若山洗其骨、而天洗其容者。余遍歴其下、復各捫其巔。洞頂靈石攢空、怪樹搏影。跨坐其上、不減群玉山頭也。「其峯昔屬靈隱、今爲張氏所有矣。」下山涉澗、即爲靈隱。有一老僧、擁衲默坐中臺、仰受日精、久不一瞬。已入法輪殿、殿東新構羅漢殿、止得五百之半。其半尚待西構

也。是日、獨此寺麗婦兩三群、接踵而至。流香轉豔。與老僧之坐日忘空、同一奇遇矣。爲徘徊久之。下午、由包園西登楓樹嶺。下至上天竺、出中・下二天竺。復循下天竺後、西循後山、得「三生石」。不特骨態嶙峋、而膚色亦清潤。度其處、正靈隱面屏之南麓也。自此東盡飛來、獨擅靈秀矣。自下天竺五里、出毛家步渡湖。日色已落西山、抵昭慶昏黑矣。

## ■ 訳注の部

### ● 訓訳

十月初一日 晴爽殊に甚し、而して西北の風 頗る厲し。

余 靜聞と共に寶石山巔に登る。巨石の堆架せる者、落星石たり。西峯の突石 尤も岬嶼たり。南に湖光の江影を望み、北に阜亭・徳清の諸山を眺め、東に杭城の萬竈を瞰る。歴歴たらざるは靡し。

山を下ること五里にして、岳王の墳を過ぐ。

十里にして、飛來峯に至る。市に飯し、即ち峯下の諸洞に入る。

大約 其の峯は楓木嶺より東に來り、靈隱の前に屏列し、此に至りて峯盡き骨露す。石は皆嵌空玲瓏なり。駢列せる三洞あり。洞は俱に透漏穿錯にして、深杳の状を作さず。昔は楊髡の刊鑿に黥され、今は遊丐の喧汚に苦しむ。而して是の時獨だ諸丐寂然たり。山間の石は爽にして、毫も聲聞の溷なる無く、山 其の骨を洗ひて、而天 其の容を洗ふ者の若し。余 其の下を遍歴し、復た各々其の巔に捫す。洞頂の靈石は空に攢り、怪樹影を搏つ。其の上に跨坐すれば、群玉山頭に減ぜざるなり。「其の峯は昔 靈隱に屬す、今は張氏の所有たり。」

山を下りて澗を涉れば、即ち靈隱たり。一老僧有り、衲を擁して中臺に默坐し、仰ぎて日精を受け、久しく一たびも瞬かず。

已に法輪殿に入る。殿の東に新たに羅漢殿を構ずるも、五百の半ばを得るに止まる。其の半ばは尚ほ西の構を待つなり。

是の日、獨り此寺に麗婦兩三の群、踵を接して至る。流香轉々豔なり。老僧の坐日忘空と、同一の奇遇なり。ために徘徊すること之を久しくす。

下午に、包園より西に楓樹嶺に登る。下りて上天竺に至り、中・下二天竺に出づ。復た下天竺の後に循ひ、西に後山に循ひ、「三生石」を得。特だに骨態の嶙峋なるのみならず、而も膚色も亦た清潤なり。其の處を度るに、正に靈隱面屏の南麓なり。此より東に飛來に盡く。獨り靈秀を擅にするなり。

下天竺より五里にして、毛家歩に出で、湖を渡る。日色已に西山に落ち、昭慶に抵れば昏黑なり。

### ● 語注

○寶石山 西湖の西北岸にある小山。「明錢塘県志」(紀勝)には「寶稷山、「一名巨石山)」  
：有石、曰壽星、曰倚雲、曰屯霞」とある。

○落星石 「清錢塘県志」に「落星石、在寶石山南嶺。：石二。一在看松臺下。銘曰壽星巖。一在塔後。俱大而圓。若星貫(おちる)爲石然、故名」とある。

○岬嶼 山が高く聳える様。また逆さまにひっくり返る様。『漢語大詞典』は、前者の用例として、『徐霞客游記「游白岳山日記」の「迴望傳巖、岬嶼雲際」を引き、後者の用例

として、同じく『徐霞客游記』『粵西游日記二』の「靜聞甫登騎、輒滾而下……試欲以車行、衆謂車之岢嶮甚於馬」を引く。ここでは前者であろう。

○徳清 明代は湖州府下の県。今は湖州市徳清県で杭州市の北に隣接する。

○竈 煮炊き用のかまど。そこから炊飯の烟が立ち上っていることを言うのであろう。

○歴歴 はつきりと明らか。ありありと見える。

○岳王 宋の忠臣岳飛（一一〇三〜四一）。

○飛来峯 下記霊隠参照。

○楓木嶺 「霊隠寺誌」巻一に「楓木嶺」が見える。後出の楓樹嶺も同じか。

○霊隠 霊隠寺。雲林寺ともいい、飛来峯を武林山ともいうので、武林とも称す。「霊隠寺誌」を含む「武林掌故叢編」という叢書がある。中国禅宗十刹のひとつ。東晋咸和年間（三二六〜三三四）の創建と伝える。インド僧慧理が飛来峯を見て、「天竺の靈鷲山そっくりで、仙靈が隠れ住まわれる場所だ」といい、山を靈鷲山が飛来してきたとして飛来峯と命名し、霊隠寺と名付けた寺を建てたという。その周囲には、五代から宋・元代に作られた仏教関連の塑像が三百点あまりも残されている。

○三洞 飛来峯には洞が多い。「霊隠寺誌」では、龍泓洞・玉乳洞・射旭洞・呼猿洞・金仏洞・香林洞・円公洞をあげる。朱恵栄は、金光洞（別名青林洞、また射旭洞）・龍泓洞（別名通天洞）・呼猿洞の三つだという。

○透漏 透かして漏れ出る。区別がはっきりしないことか。

○穿錯 入り交じる。

○楊髡 髡は髪を剃ること。僧侶の蔑称。元代のソグド人チベット仏教の僧侶、楊璉真加を指して、しばしばこの語が用いられる。彼は、フビライが南宋の都臨安を陥した後、江南釈教総統に任ぜられて江南仏教界を取り仕切った。加えて宋皇帝の陵墓や大臣の塚を暴いて副葬品を奪い、地域からも土地や財物を奪うなどの蛮行を行ったとされる。そのため江南の人士から憎まれ続けていたが、明代後半になると、杭州飛来峯の塑像の中に、彼を象ったものがあるとの話になり、仏像が繰り返し損壊されるという事件が起こっている。

徐霞客がここを訪れる十年程前にも、張岱によって塑像が破壊されている。楊璉真加への憎悪と、飛来峯仏像群への嫌悪は、明代後半にはかなり広まっており、徐霞客の口吻からもそれが伺える。詳細は、「清水二〇〇八」参照。

○溷 乱れる、汚れる。

○群玉山 穆天子が訪れたという西王母の住まい。

○楓樹嶺 「全省輿図・錢塘県下」には、霊隠から楓樹嶺に至り、上天竺寺に下る道が書き込んである。

○上天竺寺 五代後晋天福四年（九三九）の創建と伝える。法喜寺ともいう。「明錢塘県志」（紀制）には「上天竺寺、晋天福間僧道翊結庵刻畫觀音大士像」とある。

○中天竺寺 隋開皇一七年（五九七）西土より来た宝掌禅師の創建と伝える。法浄寺ともいう。「明錢塘県志」（紀制）には「中天竺寺、在稽留峯北。隋開皇十七年建、呉越改崇壽院」とある。

○下天竺寺 東晋の慧理が創建したものを、隋開皇一五年（五九五）真観禅師が重修したと伝える。法鏡寺ともいう。「明錢塘県志」（紀制）には「下天竺寺、在靈鷲山麓。晋僧慧理建」とある。

○三生石 「靈隱寺誌」に「三生石。下竺右」とある。唐代の李源と円沢禪師との友情と因縁に関わる伝説がある。

○毛家歩 「全省輿図・錢塘県下」に茅家埠があり、朱惠榮はここだとする。埠は船着き場。

### ●口語訳

〔十月一日〕

天氣が最高に明朗で爽快であるが、西北の風がとても厳しい。

私は静聞君と一緒に寶石山の頂に登った。山頂に巨石が積み重なっているものがある、これが落星石である。峯の西側の岩山が最も険しく聳えている。南には西湖の湖面の光を望み、北には阜亭や徳清県の諸山を眺め、東には杭州城内から立ち上るたくさんの人家の烟を見る。すべてがはつきりと明らかに見える。

山を五里ほど下り、岳飛の墓を過ぎる。

さらに（西に）十里で飛來峯に到る。市街で昼食を取り、その後峯下の洞窟群を巡る。

おおよそ飛來峯は楓木嶺から東に延びてきて、靈隱寺の前で屏風のように並び立ち、この場所では山峯が終わって石がむき出しになっている。この石には皆穴が空いており、表玉のように照り輝いている。三つの洞窟が並んでいる。それらの洞はともに混じり合って区別が付かなくなっており、奥深さを表していることはない。かつては楊和尚の彫刻によって破壊され、いまや乞食どもの喧噪に汚されている。しかしちようどこの時だけは、乞食どもが静かにしていた。山間に見える石はさわやかで、猥雑な喧噪も全く聞こえない。あたかも青山がその内部をきれいに洗い、蒼天がその外側を洗い流したようであった。私は洞の下を経めぐっては、山の頂に登った。洞頂の靈妙な姿の石は天に向かって集まるように屹立し、奇怪な格好の樹木は風に吹かれてその姿を動かしている。洞頂に座って辺りを眺めれば、かの西王母の住まいだという群玉山にも劣らない趣であった。「自注1」

山を下って谷川を渡ると靈隱寺である。一人の老僧がいて、法衣をまとって台の上に黙座し、空を仰いで太陽の光を浴びながら、長い間一度も瞬かないでいる。

次いで方輪殿に入る。殿の東に新しく羅漢殿を建築しているが、五百羅漢のうち半分しかできていない。おそらく残り西側に設ける羅漢殿に作るであろう。

ちようどこの日は、美しいご婦人たちの集団が二三、相次いでこの寺を訪問していた。ただよってくる女性の香がまことに艶麗であった。このご婦人がたの来訪と、先にみた老僧が太陽の光を浴びながら黙座し続けている姿とは、どちらも滅多に出会えないものである。そこでしばらくこの寺でぐずぐずと過ごす。

午後に、包園から西に行つて楓樹嶺に登る。そこを下って上天竺寺に到り、さらに中・下の二つの天竺寺に出る。再び下天竺寺の後ろに順い、西に後山に沿って進み、「三生石」のところへ到る。この石は、ただ姿がごつごつしているだけではなく、表面が清く潤っていてすばらしい。この場所は、靈隱寺の向かいの屏風の様な山峯の南麓で、その嶺はここから東に延びて飛來峯で終わっているとあるところであった。優れた景勝を独占するものである。下天竺寺から五里で毛家歩に出、そこから湖を渡る。太陽は既に西の山に落ち、昭慶寺に帰り着いたときはすっかり宵闇に包まれていた。

◆杭州に泊。

〔自注1〕飛來峯はかつては靈隱寺に所属していたが、今は張某の所有となっている。

### 〔十月二日〕

\*概要…杭州から金華への旅の始まり。今の余杭塘河沿いに西へ進んでいるが、船を雇った形跡が無く、スピードもゆっくりなので、徒歩ではないかと思われる。余杭県に入り、県城で泊。

#### ■本文の部

初二日 上午、自櫻木場五里出觀音關。西十里、女兒橋。又十里、老人鋪。又五里、倉前。又十里、宿於餘杭之溪南。訪何孝廉樸庵、先一日已入杭城矣。

#### ■訳注の部

##### ●訓訳

初二日 上午、櫻木場より五里にして觀音關に出づ。

西に十里にして、女兒橋たり。

又た十里にして、老人鋪たり。

又た五里にして、倉前たり。

又た十里にして、餘杭溪の南に宿す。何孝廉樸庵を訪ふに、先一日に已に杭城に入れり。

##### ●語注

○觀音關 今の杭州市拱墅区拱墅公園あたりか。「全省輿図・錢塘県下」に觀音橋がある。

○女兒橋 今西湖区内。余杭塘の北岸。「全省輿図・錢塘県上」、「現代地図・杭」に見える。GEでは愈家橋とあるあたり。

○老人鋪 「全省輿図・錢塘上」に老人橋があり、「陸軍図・余杭県城」には老人鋪が見える。鋪は、駅。BD・GEにも老人鋪で見える。

○倉前 今、余杭区内。「全省輿図・余杭県左下」、「陸軍図・余杭県城」、「現代地図 BD・GE」にも倉前鎮が見える。「陸軍五万図・蕪湖」には蒼前鎮とある。

○余杭溪南 「全省輿図」によれば、余杭県城は、運河の北岸にある。現在でも市街地は、運河の南岸に展開している。

##### ●口語訳

#### 《6》臨安を経て洞山へ

##### 〔二日〕

午前に櫻木場を出発し、(北に)五里で觀音関に出る。

(ここから)西に十里進むと女兒橋である。

さらに十里進むと老人鋪である。

#### 〔浙江杭州府余杭県城〕

さらに五里で余杭県の倉前である。

さらに十里進み、余杭溪の南に泊することとする。何樸庵の家を訪ねたところ、彼は一日違いで、杭州城に出かけたとのことであった。

◆余杭県域に泊。

「十月三日」

\*概要…余杭県域で担夫を傭い、ここから輿轎。臨安県に入り、県城を通過。県城西の皇潭（今の横潭）から南西に方角を変え、山路に入る。分水県に入り、全張（今の前張村）の庵で泊。庵主は日本へ渡った経験があり、そのことで懇談している。

### ■本文の部

初三日 自餘杭南門橋得擔夫。出西門、沿苕溪北岸行。十里、丁橋鋪。又十里、渡馬橋、則餘杭・臨安之界也。「其北可達徑山。」又二里爲青山。居市甚盛。溪山漸合、又有二尖峯屏峙。「一名紫薇、一名大山。」十五里、山勢復開。至十錦、一路從亭北西去者、於潛・徽州道也。從亭南西去者、即臨安道也。從亭西南又一里、一石梁橫跨溪上。曰長橋。越橋而南又一里、入臨安東關。出西關、「土城甚低、縣廡頽隘。」外爲呂家巷、闌闐反差盛於城。又二里爲皇潭。其闌闐與呂家巷同。其西路分南北、北者亦於潛之道、南者新城道也。已而復循山向西南行。又八里爲高坎、始通排。又三里、南入農柳塢、復入山隘。五里爲下圩橋。由橋南溯溪西上、二里爲全張、一村皆張氏之房也。走分水者、以新嶺爲間道、以全張爲迂道。余聞新嶺路隘而無託宿。遂宿於全張之白玉庵。僧意、餘杭人也。聞余好遊、深夜篝燈淪茗、爲余談其遊日本、事甚詳。

### ■訳注の部

#### ●訓訳

初三日 餘杭の南門橋より擔夫を得。西門を出で、苕溪の北岸に沿ひて行く。十里にして、丁橋鋪たり。

又た十里にして、馬橋を渡れば、則ち餘杭と臨安との界なり。其の北は徑山に達すべし。

又た二里にして青山たり。居市 甚だ盛んなり。溪と山と漸く合ひ、又た二尖峯の屏峙せる有り。「二は名は紫薇、一は名は大山なり。」

十五里にして、山勢復た開く。十錦亭に至る。一路の亭の北より西に去る者は、於潛・徽州の道なり。亭の南より西に去る者は、即ち臨安の道なり。

亭の西より南に又た一里にして、一石梁の溪上に横跨せるあり、長橋と曰ふ。

橋を越えて南に又た一里にして、臨安の東關に入る。西關を出づれば、「土城甚だ低く、縣廡頽隘せり。」外は呂家巷たり。闌闐反つて差や城より盛んなり。

又た二里にして皇潭たり。其の闌闐は呂家巷と同じ。其の西の路は南北に分る。北なる者は亦た於潛の道にして、南なる者は新城の道なり。

已にして復た山に循ひて西南に向かひて行く。

又た八里にして高坎たり、始めて排を通ず。

又た三里にして、南に裊柳塢に入り、復た山隘に入る。  
五里にして下圩橋たり。橋の南より溪を溯りて西に上る。

二里にして全張たり、一村皆張氏の房なり。分水に走る者は、新嶺を以て間道となし、全張を以て迂道となす。余 聞く、新嶺の路は隘にして宿を託する無しと、遂に全張の白玉庵に宿す。僧の意は、餘杭の人なり。余の遊を好むと聞き、深夜に燈を篝ともして茗を瀹わかかし、余がために其の日本に遊ぶを談ず。事甚だ詳し。

### ● 語注

○茗溪 今茗溪の名の河川は複数ある。ここでは南茗溪。余杭県の南端を通過して西から東に流れる。

○丁橋鋪 今の丁公村か。「全省輿図・余杭県左下」では丁公橋、「陸軍図・餘杭県城」では丁橋の名が見える。BD・GEには丁公村が見える。

○馬橋 県境について「全省輿図・臨安県右」では杜壩橋、「陸軍図・臨安県城」では大木橋が見える。今は青山にダムが造られており、このあたりは地形の変化が激しく、「現代地図」などではこの橋は確認できない。

○徑山 余杭県と臨安県の境にあり、馬橋から西北へ十五里ほどいったところにある。「地名簡志」に徑山があり、天目山に至る道があることが山名の由来であることや、遊覽の地であることなどを述べる。

○青山 今の青山鎮。「全省輿図・余杭県左下」「陸軍図・臨安県城」「陸軍五十万図・蕪湖」やBD・GEなど各種地図同じ。

○紫薇・大山 「陸軍図・臨安県城」などからも、青山鎮から西へは次第に両側に山が迫ってくるのが確認できる。しかしこの二峯については不詳。

○十錦亭 「全省輿図・臨安県右」には、長橋の東にこの名が見えるが、陸軍図などには見えない。

○於潛 今の臨安市於潛鎮。明では杭州府下の県。「地名簡志」に名の由来などを述べる。  
○徽州 安徽省のことか。

○臨安 今の杭州地級市臨安市。明代は、杭州府下の県。南宋時代は杭州を臨安と呼んだが、のちにその西にある町が臨安と名付けられた。「地名簡志」に記事がある。

○長橋 今、長橋村がある。「全省輿図・臨安県右」「陸軍図・臨安県城」に長橋が見え、BDと「現代地図・臨安」には長橋村がある。

○臨安東關・西關 「陸軍図・臨安県城」によれば、臨安県城は東西で七百五十りほどしかなかったようである。

○皇潭 今の横潭。「全省輿図・臨安県右」には横潭鎮、「陸軍図・臨安県城」「陸軍五十万図・蕪湖」には横潭の名が見える。GEには横潭村が見え、BDと「現代地図・臨安」では横潭路として名が見える。今は臨安市内に位置づけられているが、当時は県城からかなりはずれた郊外にある村落だった。

○新城 今の富陽市新登鎮。明代は杭州府内の県。

○高坎 今も同じ。臨安市の内。「全省輿図・臨安県右」に高坎村、「陸軍図・臨安県城」には高坑とある。

○排 並べたもの。ここでは竹を並べて編んだ筏か。

○梟柳塢 不詳。「陸軍図・臨安县城」では、高坑から西北の山間が始まるあたりに孫家頭という集落の名が見え、同じ名がBD・GE等にも見える。

○下圩橋 「全省輿図・臨安県右」には下輿橋が、「陸軍図・鷄籠山」には下魚橋がある。朱惠榮は今の夏禹橋だという。BDには夏禹街が、「現代地図・臨安」には夏家橋の名が見える。

○全張 今の前張村ではないか。「全省輿図・臨安県右」「陸軍図・鷄籠山」には、前張村が見え、同じ名がBD・GEにも見える。村名の由来が、全村民が張なので「全張」であるという徐霞客の説は、前張に名前が変わると成り立たなくなる。

○分水 今の杭州地級市分水県。明代は杭州府内の県。於潜から南流して桐廬で富春江に注ぐ分水江の中流にある。

○新嶺 臨安県と於潜県との境の峠道。「全省輿図・臨安県右」では、下輿橋村から西南に下ると新嶺に至り、西に進むと前張橋がある。「陸軍図・鷄籠山」「同・於潜県治」では、下魚橋から西南に下ると新嶺に至り、西に進むと前張村となる ○白玉庵：不詳。全張村の草庵であろう。

○意 白玉庵の庵主の名であろう。

### ●口語訳

〔三日〕

余杭県城の南門橋で、担夫を傭う。西門から城外へ出て、苕溪の北岸沿いに（西へ）進む。

十五里で丁橋鋪である。

さらに十里進み、馬橋を渡ると、余杭県と臨安県との境界である。その北は、徑山に達する。

〔浙江杭州府臨安県域〕

さらに二里で、臨安県の青山である。市街はとても賑やかである。溪流と山とが次第に近づき、また二つの尖った峯が向かい合って聳えている。〔自注1〕

さらに十五里で、再び山が開け、十錦亭に到る。亭の北から来て西に行く一路は、於潜県から徽州へ行く道である。亭の南を通過して西に行く一路は、つまり臨安県城への道である。

亭の西から南へまた一里で、ひとつの石橋が溪流の上に跨っていた。長橋という。橋を渡り、南にまた一里で、臨安県城の東関に入る。

そのまま西関を出ると、「自注2」その外は呂家巷である。その市街は臨安県城よりも却って盛んである。

さらに二里で皇潭である。その市街地は呂家巷と同じくらいである。その西で道が南北に分かれる。北への道はこれもまた於潜県への道で、南の道が新城県へ到る道である。

（そのどちらも選択せず）ほどなく再び山なりに西南に向かって進む。

さらに八里で高坎である。ここからやと筏を浮かべて通れる水流がある。

さらに三里で南に曲がって梟柳塢に入り、再び山間に入る。

五里で下圩橋である。橋の南から溪流を遡って西へ上がる。

二里で全張村である。村中の人の姓が張の家族である。分水県に向かう者は、新嶺を脇



道とし、全張の道を回り道とする。私が聞いたところ、新嶺の道は狭く、泊まる所もないと。そこで結局全張の白玉庵に泊まることとする。庵主の意という僧侶は余杭県の人であった。私が旅遊を好んでいると聞き、深夜であるにも関わらず、灯火をともし、お茶を沸かしてくれ、私に彼が日本に旅遊したときのことを語ってくれた。そのことはとても詳細であった。

◆全張に泊。

〔自注1〕ひとつは紫薇峯で、もうひとつは大山である。

〔自注2〕臨安県は城壁がとても低く、県署もぼろぼろである。

〔十月四日〕

\*概要・輿輳で西南へ。山路を進んで新城県（今の新登県）に入り、仙洞山を訪ねる。二つの洞窟を訪ねた詳細な記述があるが、大収穫だったと喜んでいる。洞外の村落で泊。長文なので、訳注は三部に分けた。

■本文の部

初四日 雞鳴作飯、味爽西行。二里、過橋。折而南又六里、上乾塢嶺。其嶺甚坦夷。蓋於潛之山西來過脈。東西皆崇山峻嶺、獨此峽中坳。過脊處止丈餘、南北疊踞而下、皆成稻畦。北流至下圩橋、由青山入苕。南流至沙宕、由新城入浙。不意平陀遂分兩水。其山過東、遂插天而起、曰五尖山。「五尖之東北、即新嶺矣。」循其西麓、又五里過唐家橋、則新城北界也。白石崖山障其南、遂循水西南行。五里爲華龍橋。有水自西塢來合。過橋、南越一小嶺。二里至沙宕。前有一石梁跨澗。曰趙安橋。則入新城道也。由橋北西湖一澗。沿三九山北麓而入後葉塢。「三九」之名、以東則從趙安橋南至朱村、北則從趙安橋西南至白粉牆、南則從白粉牆東南至朱村、三面皆九里也。由後葉塢九里至白粉牆。爲三九山北來之脊。其脊亦甚坦夷。東流者由後葉出趙安橋、西流者由李王橋合朱村。此「三九」所以名山、亦以水繞無餘也。白粉牆之西二里、爲羅村橋。有水自北來。有路亦岐而北、則新城道也。循水南行里許、爲鉢孟橋。有水西自龍門龕來。「龕有四仙傳道嶺、在橋西四里、乃於潛境。」由橋北即轉而東、里餘復折而南。其地東爲三九、西爲洞山、環塢一區、東西皆石峯嶙峋。黑如點漆、丹楓黃杏、翠竹青松、間錯如繡。水之透壁而下者、洗石如雪。今雖久旱無溜、而黑崖白峽、處處如懸匹練。心甚異之。二里、渡李王橋。遂至洞山之東麓。急置行李於吳氏先祠。令僮覓炊店、不得。有吳姓者二人至、一爲余炊、一爲贈燭遊洞。余以魚公書扇答之。「洞山者、自龍門龕南迤邐東來。其石稜銳紋疊。東南山半開二洞、正瞰橋下。」余遂同靜聞西向躡山。

沿小澗而上。石皆峽蹲壑透、清流漱之、淙淙有聲。澗兩旁石片踊出田畦中、側者成陸、突者成臺。竹樹透石而出、枝聳石上、而不見其根。幹壓石巔而不見其竇。再上、忽一大石當澗而立。端方無倚、而紋細如波縠之旋風。最爲靈異。再上、修竹中有新建睢陽廟。雪峯之龕在焉。「一名靈隱庵。」庵後危壁倚空、疊屏聳翠。屏之南即明洞也。如軒斯啓、其外五柱穿列、正如四明之分窗。「但四明石色劣下、不能若此列柱連卷也。」中有一柱。上不

至簷、簷下亦垂一石、下不至柱、上下相對、所不接者不盈咫。柱旁有樹高撐。至簷端輒遜而外曲。翠色拂巖而上、黑石得之益章。再南即爲幽洞。二洞並啓、中間石壁、色輕紅若桃花。洞口高懸、內若橋門之覆空、得呼聲輒傳響不絕。蓋其內空峒無底也。廿丈之內、忽一轉而北、一轉而南。北者爲乾洞。拾級而上、如登樓躡閣。三十丈後、又轉而南、闢一小閣、頗覺幽異。南者爲水洞。一轉即仙田成畦、塍界層層。水滿其中、不流不涸。人從塍上曲折而入。約廿丈、忽聞水聲潺潺。透一小門而入、見一小溪自南來。至此破壑下墜。宛轉無底、但聞其聲。循溪而南、又過一峽。仍透小門而入、須從水中行、乃短衣去襪、溯水躡流。又三十丈、中有石<sup>レ</sup>倒垂若蓮花、下捲若象鼻者。平沙隘門、忽東忽敞。〔正如荊溪白鶴洞、而白鶴潛伏山麓、得水爲易、此洞高關山巔、兼水尤奇耳。〕再入、則石洞既盡、匯水一方、水不甚深。又不知匯者何來、墜者何去也。及出洞、半日之間、已若隔世。

下山、飯於吳祠。乃湖南來之溪、二里至太平橋。橋西爲高氏、橋東爲吳氏、亦李王橋之吳氏之派也、亦有先祠甚宏暢。時日色甚高、因擔夫家近、欲歸宿、託言馬嶺無宿店、遂止祠中。是日行僅三十五里、而所遊二洞、以無意得之、豈不幸哉。是晚風吼雲屯、達旦而止。

### ●校勘

\* 1 石 底本になし。褚紹唐らが、「疑「中有」下脱「石」字」とするのに従い、補う。

### ■訳注の部

#### 「その一」

### ●訓詁

初四日 雞鳴に飯を作り、味爽に西に行く。

二里にして、橋を過ぐ。

折れて南すること又た六里にして、乾塢嶺を上る。其の嶺甚だ坦夷なり。蓋し於潛の山は西より來りて過ぐる脈なり。東西皆崇山峻嶺なるも、獨り此の峽のみ中ごろ坳なり。脊を過ぐるの處は止だ丈餘のみにして、南北は塍の疊して下り、皆稻畦を成すなり。北の流れは下圩橋に至り、青山より茗に入る。南の流れは沙宕に至り、新城より浙に入る、意はざりき平陀の遂に兩水を分つを。其の山を過ぎて東し、遂に天に挿して起つ、五尖山と曰ふ。〔五尖の東北は、即ち新嶺なり。〕

其の西の麓に循ひて、又た五里にして唐家橋を過ぐれば、則ち新城の北界なり。白石崖山其の南を障し、遂に水に循ひて西南に行く。

五里にして華龍橋たり。水の西の塢より來りて合する有り。

橋を過ぎ、南に一小嶺を越ゆ。

二里にして沙宕に至る。前に一石梁の澗を跨ぐ有り。趙安橋と曰ふ。則ち新城に入るの道なり。

橋の北より西して一澗を遡る。三九山の北麓に沿ひて、而して後葉塢に入る。「三九」の名は、東は則ち趙安橋より南して朱村に至り、北は則ち趙安橋より西南にして白粉牆に至り、南は則ち白粉牆より東南して朱村に至る、三面皆九里なるを以てなり。

後葉塢より九里にして白粉牆に至る。三九山北來の脊たり。其の脊も亦た甚だ坦夷なり。東流する者は後葉より趙安橋に出で、西流する者は李王橋より朱村に合す、此「三九」の山を名づくる所以にして、亦た水を以て繞らして餘り無きなり。

白粉牆の西に二里にして、羅村橋たり。水の北より來る有り。路の亦た岐して北する有り、則ち新城の道なり。

水に循ひて南に行くこと里許にして、鉢盂橋たり。水の西のかた龍門龕より來る有り。「龕に四仙傳道嶺有り、橋の西四里に在り、乃ち於潛の境なり。」

橋の北より即ち轉じて東して、里餘にして復た折れて南す。其の地は東は三九、西は洞山たりて、環せる場の一區たりて、東西皆に石峯嶙峋たり。黒きこと漆を點するが如く、丹楓黃杏、翠竹青松、間錯すること繡の如し。水の壁を透して下る者、石を洗ひて雪の如し。今は久しく早して溜無しと雖も、而も黒き崖や白き峽の、處處匹練を懸くるが如し。心に甚だ之を異とす。

二里にして、李王橋を渡る。遂に洞山の東麓に至る。急ぎて行李を吳氏の先祠に置く。僮をして炊店を覓めしむるも、得ず。吳姓なる者二人の至る有り、一は余がために炊ぎ、一はために燭を贈り洞に遊ばんとす。余 魚公の書扇を以て之に答ふ。洞山なる者は、龍門龕の南より迤邐して東に來る。其の石は稜は銳にして紋は豊たり。東南の山の半ばに二洞を開く、正に橋下を瞰る。余 遂に靜聞と同一西に向かひて山を躡む。

### ● 語注

○乾塢嶺 今の甘塢里だろう。「全省輿図・臨安県右」「陸軍図・於潛県治」「同十万分一・余杭県」に甘塢里があり、BD・GEに甘塢里村が見える。

○五尖山 「全省輿図・臨安県右」と「同・新城県左」に、両県の境に五尖山がある。「陸軍図・於潛県治」も同じ。

○唐家橋 今の塘家橋。ここから新城県(今の新登県)になる。「全省輿図・新城県左」「陸軍図・於潛県治」に唐家橋があり、BD・GEには塘家橋が見える。

○白石崖山 今の白石村あたりだろう。「陸軍図 同」に、唐家橋の西に、白石駱が見え、BD・GEに白石村の名が見える。

○華龍橋 確認できなかった。朱惠榮は今の華龍で、臨安県の南隅とする。「全省輿図」やBDでは、唐家橋の東に「界橋」を置く。ここが臨安県と新城県の境となるようである。そうであれば、華龍を県界とする朱惠榮の説は間違っていることになる。

○趙安橋 「清新城県志」卷三に南新郷のうちとして趙安橋があり、「全省輿図・新城県左」「陸軍図・於潛県治」に趙安橋が見える。BD・GEにはその名を見ない。

○三九山 「明新城県志」に「龍邱山瑞應山三九山鷄棲山千頃山俱在縣西五十里南安郷」とある。「全省輿図・新城県左」「陸軍図・於潛県治」に三九山が見える。

○後葉塢 「陸軍図・於潛県治」「同十万分一・余杭県」に後楊塢が見える。朱惠榮は今の後源塢で、富陽県の西隅とする。BDでは下塘塢、GEでは上家塢がこのあたりに見える。

○朱村 趙安橋・羅村と三角形をなすもう一つの頂点を、「全省輿図 同」では万氏鎮、「陸軍図 同」では范氏鎮、BD・GEでは万市鎮とする。

○白粉牆 「全省輿図・新城県右」に白粉牆嶺が、BDに白粉塘ある。

○李王橋 「全省輿図・新城県左」に李王橋があるが、徐霞客のいう位置とは異なっている。あるいは徐霞客が別の橋とこの李王橋とを取り違えたのかもしれない。

○羅村橋 今の羅宅村。「清新城県志」卷一に南安郷のうちとして「羅宅村」がある。「全

省輿図・新城県右」「陸軍図・於潜県治」「陸軍五十万図・蕪湖」に羅宅橋が、BD・GEに羅宅村が見える。

○龍門龕 「陸軍図・於潜県治」やBD・GEに、羅宅橋の西に龍門橋がある。

○今雖久旱無溜：朱惠榮は「流れが涸れていて水気がまったくない」と訳すが、直前の記述からはそうは取りがたい。やや苦しい訳だが、少しは水気があるように解した。

○洞山 洞山あるいは仙洞山。「清新城県志」景境図に南安郷のうちとして、洞山が見える。「全省輿図・新城県右」には仙洞山が見え、「陸軍図 同前」は楓樹塢と表記、「陸軍五十万図・蕪湖」には洞橋頭と記す。「清新城県志」には洞下村、BDには洞山背、洞山洞が見える。

○二洞 洞山の洞は、靈隠洞という。文献等は後述。

## ●口語訳

〔四日〕

夜明けに食事を作り、黎明に西に出発する。

二里で橋を過ぎる。

そこを南に折れ、さらにまた六里で乾塢嶺を上っていく。この山路は甚だ平坦である。思うに、於潜県の山々は西からやってくる山脈である。東西には高峻な山嶺があるが、ただこのあたりは峡谷となつて低くなっている。山の背を越えるあたりも一丈ばかりの中しかないが、南北両面には棚田が重なりあつて広がっており、水田を形成している。ここから北への流れは下圩橋に到り、青山鎮から茗溪に注ぐ。南への流れは沙岩に到り、新城県から錢塘江に注ぐ。こんな低い丘が分水嶺となつているとは思ひもよらなかつた。この山脈は更に東に進み、ついには天に向かって突き立つような、五尖山となる。〔自注1〕

五尖山の西麓沿いに進み、さらに五里で唐家橋を過ぎると、新城県の北の境域である。

〔浙江杭州府新城県域〕

《7》洞山

白い石の崖が南に壁のように立ちはだかつており、そこで川の流れに沿って西南に進む。

五里で華龍橋である。西の塢から流れてきてここで合流する川がある。

橋を渡り、南へ小さな峠を一つ越える。

二里で沙岩に到る。前に石橋がひとつあり、川を跨いでいる。趙安橋という。ここを渡れば、新城へ向かう道である。

(しかし渡らず) 橋の北を西に、小川を遡って進む。三九山の北麓に沿って進む、後葉塢に入る。「三九」という名は、山の東側を趙安橋から南へ下ると朱村に至り、北側を趙安橋から西南に行けば白粉牆に至り、南側を白粉牆から東南に行けば朱村に至る。この三面の道のりが、いずれも九里だからの命名である。

後葉塢より九里で白粉牆に至る。このあたりは三九山から北へ延びた山嶺である。ただその山嶺もとても平坦である。東の流れは後葉塢から趙安橋に出、西の流れは李王橋から朱村に流れ、そこで合流する。これも「三九」という山名の由来であり、水流が山をあますところなく廻っているからである。

白粉牆の西に二里で羅村橋がある。北から流れてくる川がある。枝分かれして北へ向かう道もある、これも新城県へ至る道である。

川沿いに南に一里程行くと、鉢盂橋である。西の龍門龕から流れてくる川がある。龕には四仙傳道嶺があり、鉢盂橋の西に四里の所に在る。そこが於潜県との境である。

橋の北から東に転じ、一里ほどで南に折れる。ここは東が三九山、西が洞山で、円形の山塙を形成しており、東西にはごつごつした岩山が見える。その石の黒さは漆を塗ったようで、その間に赤い楓や黄色い銀杏、さらに緑なす竹や松がまじり、彩絹のようである。その中で岩壁から浸みだした滝が、雪のように白くなり、石を洗って落ちていく。現在は水流が乏しく滞留するほどのものはないが、黒い崖や白い溪谷が、あちこちに練り絹を懸けたように見える。私はすばらしい景勝であると感心した。

二里で李王橋を渡る。ついに洞山の東麓に達した。急いで荷物を呉氏の先祖を祭る祠に預ける。召使いに食事のできる店を探させたが見つからない。すると二人の呉姓の人達が来て、ひとりは食事のしたくをしてくれ、もうひとりは灯火を用意して洞窟に案内しようとしてくれた。私は魚公が書いた扇をお返しにプレゼントした。洞山は、龍門龕の南からうねうねと東に伸びたもの。その石質は角が尖り、重なりあう紋がある。東南の山の半ばにふたつの洞が口を開けていて、そこから李王橋の下を眺めることができる。私はそのまま静聞君と一緒に西に向かって山を登った。

〔自注1〕五尖山に東北が、新嶺である。

## 〔その二〕

### ● 訓詁

小澗を沿ひて上る。石は皆 峽に 蹲り壑を透るがごとくにして、清流之に漱ぎ、淙淙として聲有り。澗の兩旁の石片、踊り出づること田畦の中よりするがごとく、側ける者は脛を成し、突せる者は臺を成す。竹樹石を透して出で、枝は石の上に聳え、而して其の根を見ず。幹は石巔を壓し、而して其の竇を見ず。

再び上るに、忽ち一大石の澗に當りて立つ。端方にして倚る無く、而して紋細は波穀の旋風の如し。最も靈異たり。

再び上るに、修竹の中に新たに建てる睢陽廟有り。雪峯の龕 焉に在り。「一に靈隱庵と名す。」庵の後は危壁空に倚り、疊屏聳翠たり。

屏の南は即ち明洞なり。軒の斯に啓くが如く、其の外は五柱穿列し、正に四明の分窓の如し。但だ四明は石の色劣下にして、此の列柱の連卷たるが若きこと能はざるなり。中に一柱有り。上は簷に至らず、簷の下にも亦た一石を垂れ、下は柱に至らず。上下相い對し、接せざる者咫に盈たず。柱の旁に樹の高く撐ふる有り。簷の端に至れば輒ち遜して外曲す。翠色巖を拂ひて上り、黒石之を得て益々章かなり。

再び南すれば即ち幽洞たり。二洞並び啓き、中間の石壁は、色は輕紅にして桃花の若し。洞口は高懸にして、内は橋門の空に覆くが若し、呼聲あれば輒ち傳響して絶えざるを得。蓋し其の内は空峒にして無底ならん。

廿丈の内にて、忽ち一轉して北し、一轉して南す。

北なる者は乾洞たり。級を拾ひて上ること、樓に登り閣を躡むが如し。三十丈の後にして、又た轉じて南すれば、一小閣を闢く、頗る幽異を覺ゆ。

南なる者は水洞たり。一轉して、即ち仙田 畦を成し、塍界層層たり。水 其の中に満

ち、流れず涸れず。人は陸の上より曲折して入る。約廿丈にして、忽ち水聲の潺湲たるを聞く。一小門を透して入るに、一小溪の南より來り、此に至りて壑を破りて下り墜つるを見る。宛轉として底無く、但だ其の聲を聞くのみ。

溪に循ひて南し、又た一峽を過ぐ。小門を透して入るに仍りて、須らく水の中より行くべし、乃ち衣を短かくし襪を去り、水を溯りて流れを躡む。

又た三十丈にして、中に石の倒垂せること蓮花の若く、下は捲きて象の鼻の若き者有り。平らな沙と隘き門とあり、忽ち束し忽ち敞せり。正に荊溪の白鶴洞の如くにして、而も白鶴は山麓に潜伏して、水を得ること易しとなす。此の洞は山巔に高く關きて水を兼ね。尤も奇なるのみ。

再び入れば、則ち石洞既に盡き、水を一方に匯め、水は甚だしくは深からず。又た匯まる者何れより來たり、墜つる者何れに去るかを知らざるなり。

洞を出づるに及び、半日の間にして、已に世を隔たるが若し。

### ●語注

○睢陽廟 睢陽は河南省の県。張巡という男がいて、安録山の乱に際し、睢陽城に籠もつて賊軍と戦い、戦死した。彼を褒め称えて「睢陽」と呼ぶことがある。あるいはこの張巡を祭った廟か。「清新城県志」巻八に張瓚撰「遊靈隱洞」という文を収録するが、そこでも「踰層崖、歷睢陽公祠、度約略曲折以上、纔至洞口」とある。

○靈隱菴 「清新城県志」に「靈隱菴、在南安郷洞山上」とある。

○明洞・幽洞 洞山の洞は靈隱洞という。「明新城県志」「清新城県志」卷二に「靈隱洞、在縣西六十里南安郷。高可十丈、闊五丈。深不可測。中分二洞。一有水、清淺可玩。洞盡處又有口、如甕水。音澎湃、其聲不絶。一無水。洞上石乳滴成如鎚劍」とある。前注の「遊靈隱洞」に訪問記録がある。

○橋門之覆空 いまひとつぴんと来ない。朱惠榮は「傾覆的橋門」と訳す。橋門には古代の太学の施設という意味があるが、ここでは閘門（川の水の取り入れ口）のことか。

○中有一柱く所不接者不盈咫 下から成長する石筍と上から延びる鍾乳石とが接近し、しかし石柱を成すには至っていない様を描いたものではないか。

○仙田成畦 リムストーン（畦石）でできられたリムプールが、階段状をなしている様を描いたものではないか。

○荊溪 江蘇省南部の川。宜興を経て太湖に注ぐ。

### ●口語訳

小さな溪流に沿って登る。その石は峡谷に蹲ったり、崖から飛び出しているかのようで、そこに清流が注ぎ、せせらぎの音を立てている。溪流の兩岸に踊り出でている石片はまるで田畑の畦のようで、斜めに立っているものは畦のようで、突起しているものは平らな台のようである。竹が石の中から生えていて、枝は石の上に聳えているのに、根の部分は見えない。その幹は岩の頂を覆はんばかりで、隙間も見えないほどである。

（しばらく見物した後）再び登攀を開始すると、忽然として大きな岩が溪流を塞ぐように立っている。まっすぐすすきりと独立立っていて、表面にある微細な石紋は風に吹かれて波打つ縮緬のようである。靈妙奇異の極みである。

(しばらく鑑賞した後)再び登れば、丈の長い竹藪の中に、新築の睥陽廟があった。雪峯をまつる石室がそこにあった。「自注1」庵の後ろは切り立った岩壁が空に向かい、屏風のように重なりあつて青々と聳えている。

その屏風の南が明洞である。楼閣の軒がそこで開いているかのようで、外には五本の脊柱が突き立っている。まさに四明山の「分窓」のようである。ただし、四明山のものは石の色がやや劣っており、ここの石柱が巻くようにまがっているのには及ばない。その中の一本は、上に伸びているが軒の庇には至っておらず、庇からも石が垂れているが下の柱までは至っていない。上下にあい対して、その隙間は二十寸以下しかない。石柱のそばに一本の樹木が有り、すくと高く生えている。上の洞窟の庇にぶつかったところですぐに外に曲がっている。その木の緑は巖を覆い、黒い岩肌と映え合つて明らかである。

その南に、幽洞がある。この二洞は並んで口を開けており、その中間の岩肌は、桃の花のような淡い紅色をしている。洞口は高いところにあり、その入り口は閘門が空に向かつて傾いているかのよう。洞内に向けて呼声を発すると、ずっと響いてなかなか消えない。おそらくその中は空洞で、底なしに続いているのであろう。

(さらに進み)二十丈も行かないうちに、たちまち北へ南へと一転している。

北は乾いた洞がある。石段を登るが、まるで楼閣を踏み上げるかのようなようである。三十丈で、また南に転じ、一軒の小さな楼閣があつた。奥深い静けさを感じる。

南は水を湛えた洞がある。水はひとめぐりすると、すぐに仙人の水田をなし、畦が何層にも整っている。水が水田に満ち満ちており、外に漏れ出ることもなく、かつ干上がることもない。人は畦を踏んで曲がりながら洞に入る。およそ二十丈進むと、忽然として滔々とした水音が聞こえる。小さな門をくぐつて進むと、一本の小川が南から流れてきて、ここに至つて谷を突き破つて流れ落ちているのが見える。ぐるぐる廻つて落ちていて、底が見えず、ただ水音を聞くのみである。

溪流に沿つて南に進み、また峡谷をひとつ越える。先には小さな門をくぐつて入つたので、(さらに進むためには)水の中を通つて行かなければならない。そこで上衣を引っ張り上げ、ズボンは脱いでしまい、流れに入つて遡っていく。

また三十丈ほどで、溪流の中に鍾乳石が生えており、蓮華のように倒れかかり、その先端が象の鼻のように曲がっている。そこは平らな砂地と狭い門口とが次々と連続し、狭まったと思つたら広がっている。それはちようど荆溪の白鶴洞のようだ。ただし、白鶴洞は山の麓に潜んでいるので、水を得るのも容易だろう。しかしこの洞窟は、山の頂に高く口を開けているものであり、水がたくさんあるのは本当に不思議なことである。

また進むと、洞窟はおしまいになっていた。そこには水が集まり湛えられていたが、それほど深くはなかった。また集まっている水がどこから来て、どこへ流れ落ちているのかは分からない。

洞窟を出ると、半日の間に何十年もたったような感じがした。

「自注1」そこはまた靈隱庵とも称されている。

### 【その三】

#### ● 訓訳

山を下り、呉祠に飯す。

乃ち南來の溪を遡り、二里にして太平橋に至る。橋の西は高氏たり、橋の東は呉氏たり。亦た李王橋の呉氏の派ならん。亦た先祠有り、甚だ宏暢なり。

時に日色甚だ高きも、擔夫の家の近く、宿に歸らんと欲し、馬嶺に宿店無からんと託言するに因りて、遂に祠中に止まる。

是の日は行くこと僅に三十五里なるも、而も遊ぶ所の二洞は、無意を以て之を得たり。豈に不幸ならんや。

是の晩風吼へ雲屯し、旦に達して止む。

### ●語注

○太平橋 今も同じ。「陸軍図・於潜県治」・BD・GEにも見える。

○馬嶺 今も同じ。新城県と於潜県との境をなす峠道。「清新城県志」県境図に、南安郷のうちとして、馬嶺が見える。

### ●口語訳

洞山を下り、呉氏の祠で食事を取る。

さらに南から来ている溪流を遡り、二里で太平橋に至る。この橋の西側には高姓の人が住み、東側には呉姓の人が住んでいる。彼らもまた李王橋の呉姓の人々の一派であろう。ここにもまた先祖を祭る祠があり、とても広々としている。

その頃は、まだ太陽が天空にあったが、担夫の家が近くで、帰って休みたいというし、馬嶺あたりには宿泊できるところもなさそうなので、その祠に止宿することとする。

この日は、進んだ距離はわずか三十五里であったが、遊覧した二つの洞窟は、どちらも予定外のもので（すばらしいもので）あった。誠に幸いなことであった。

晩は風が吼えるように吹き荒れて雲が垂れ込めていたが、明け方になって風はやんだ。

◆太平橋の祠に泊。

### 「十月五日」

\*概要…朝にアクシデント発覚。これまで付き従っていた担夫が逃亡していたのだ。ようやく替わりを見つけ出発。馬嶺を越え、於潜県に入る。輿轎で西南に下り、応渚埠（今の印渚鎮）のやや北で、船に乗る。分水江を下り、すぐに嚴州府分水県に入る。当初徐霞客は、分水県城から西へ八十里の淳安へ向かう予定であった。しかし、荷物を担ぐ担夫が逃亡してしまい、陸行は不便であることから、これを断念。舟行で分水江を進み、一気に富春江と合流する桐廬まで下ることとした。嚴州府桐廬県に入り、夜半に桐廬県城に到着。船中泊。

### ■本文の部

初五日 雞再鳴、令僮起炊。炊熟而歸宿之擔夫至。長隨夫王二已逃矣。飯後又轉覓一夫、久之後行。南二里、上馬嶺、約里許達其巔。「嶺以北屬新城、水亦出新城。嶺南則屬於潛、



縣在其西北五十里、水由應渚埠出分水縣。」下馬嶺、南二里爲内楮村塢。又一里爲外楮村塢、從此而南、家家以楮爲業。隨山塢西南七里、過兌口橋。岐分南北。「北達於潛、可四十里。」南抵應渚埠、十八里。兌口之水北自於潛、馬嶺之水東來、合而南去、路亦隨之。八里、過板橋。橋下水自西塢來、與前水合。「溯水西走、路可達於潛及昌化。」又南五里爲保安坪。又一里爲玉澗橋、「橋甚新整、居市亦盛。又名排石。」山始大開。又東二里、止於唐家拱。其地在應渚埠北二里、原無市肆。擔夫以、應埠之舟下桐廬者、必北曲而經此。遂止於溪畔。久之得桐廬舟。「蓋應渚埠爲於潛南界、溪之南即隸分水。於潛之水北經玉澗橋、昌化之水西自麻汊埠、俱會於應渚、而水勢始大。顧玉澗橋而上、已不勝舟。麻汊埠而上、小舟直抵昌化。於潛水固不敵昌化也。」時日已中、無肆覓米。欲覓之應埠、而舟不能待、遂趁之行。下舟東南行十里、爲分水縣。縣在溪之西。分水原止一水東南去。其西雖山勢豁達、惟陸路八十里達於淳安。余初欲從之行、爲王奴遁去、不便於陸、仍就水道、反向東南行矣。去分水東南二十里爲鋪頭。又十里爲焦山、居市頗盛。已暮、不能買米、借舟人餘米而炊。舟子順流夜槳。五十里、舊縣。夜過半矣。

## ■ 訳注の部

### ● 訓訳

初五日 雞再鳴に、僮をして起し炊がしむ。炊熟して而して宿に歸るの擔夫至る。長く隨へる夫の王二 已に逃ぜり。

飯の後、又た轉して一夫を覓め、之を久しくして後に行く。

南に二里にして、馬嶺に上る。約里許にして其の巔に達す。嶺以北は新城に屬す、水も亦た新城に出づ。嶺の南は則ち於潛に屬す、縣は其の西北五十里に在り、水は應渚埠より分水縣に出づ。

馬嶺を下り、南に二里にして内楮村塢たり。

又た一里にして外楮村塢たり。此よりして南は、家家楮を以て業となす。

山塢に隨ひて西南に七里にして、兌口橋を過ぐ。岐南北に分かる。北は於潛に達す、四十里なるべし。南は應渚埠に抵る、十八里なり。兌口の水は北のかた於潛よりし、馬嶺の水は東より來り、合して南に去る、路も亦た之に隨ふ。

八里にして、板橋を過ぐ。橋の下の水は西の塢より來り、前水と合す。水を溯りて西に走れば、路 於潛及び昌化に達すべし。

又た南に五里にして保安坪たり。

又た一里にして玉澗橋たり、「橋は甚だ新整にして、居市も亦た盛なり。又た排石と名す。」山始めて大いに開く。

又た東に二里にして、唐家拱に止まる。其の地は應渚埠の北二里に在り、原より市肆無し。擔夫以ふ、應埠の舟の桐廬に下る者は、必ず北に曲りて此を経ると。遂に溪の畔に止まる。之を久しくして桐廬の舟を得。蓋し應渚埠は於潛の南界たりて、溪の南は即ち分水に隸す。於潛の水は北のかた玉澗橋を経、昌化の水は西のかた麻汊埠よりし、俱に應渚に會す、而して水勢始めて大なり。顧だ玉澗橋より上は、已に舟に勝へず。麻汊埠より上は、小舟にて直ちに昌化に抵る、於潛の水は固より昌化に敵せざるなり。

時に日 已に中すも、肆の米を覓むる無し。之を應埠に覓めんと欲するも、而も舟は待つ能はず、遂に之に趁きて行く。

舟に下りて東南に行くこと十里にして、分水縣たり。縣は溪の西に在り。分水は原より一水の東南に去るに止まる。其の西は山勢豁達なりと雖も、惟だ陸路にして、八十里にして淳安に達す。余初めは之に従ひて行かんと欲するも、王奴の遁去せるがため、陸するに便ならず、仍りて水道に就き、反つて東南に向かひて行く。分水を去ること東南に二十里にして鋪頭たり。又た十里にして焦山たり、居市頗る盛なり。已に暮る、米を買ふ能はず。舟人の餘米を借りて炊ぐ。

舟子 流れに順ひ夜に槳す。

五十里にして、舊縣なり。夜半ばを過げり。

### ●語注

○王二 徐霞客が長く使っていたという担夫。担夫は現金収入が得られる仕事だが、過酷な仕事でもあり、途中で放り出して逃亡することはよくあったようである。

○内楮村塢 「陸軍図・印渚鎮」、BD・GEには、朱村塢の名が見える。

○應渚埠 今の印渚鎮。「全省輿図・於潜県下」「陸軍五十万図・廣信」に、印渚鎮がある。

○楮 落葉低木。樹皮は紙の原料となる。

○兌口橋 現代も同じ。「全省輿図・於潜県下」「陸軍図・印渚鎮」に兌口橋があり、BD・GEも同じ。

○板橋 今の徐橋村あたりか。「全省輿図・於潜県下」「陸軍図・印渚鎮」に、板橋村がある。BD・GEでは徐橋村の名が見える。

○昌化 今の臨安市昌化鎮。明代は杭州府下の県。

○保安坪 今の保安村。「全省輿図・於潜県下」「陸軍図・印渚鎮」に保安坪があり、BD・GEでは保安村の名が見える。

○玉潤橋・排石 「全省輿図・於潜県下」に玉潤橋があり、「陸軍図 同」に排石橋が見える。このあたりもダムが造られてかなり地形が変わっており、この橋のあたりも水没している。

○麻汊埠 朱惠榮は今の麻車埠という。その名は「陸軍五十万図・廣信」に見える。

○於潜水 朱惠榮は、紫溪という名だとする。

○昌化（水） 朱惠榮は、柳溪と称していて、今は天目溪だとする。

○分水縣 今の杭州地級市桐廬県分水鎮。明代は、嚴州府分水県。

○淳安 今の淳安市。明代は杭州府下の県。富春江に注ぐ新安江のほとりにあり、今の千岛湖があるのなど、景勝の地であった。徐霞客はここを訪れる予定だったのだろう。

○鋪頭 「全省輿図・分水県左上」「陸軍図・分水県治」に畢浦鎮が、BDに畢浦郷が、GEには畢浦村が見える。ここから南は、桐廬県内。

○焦山 「全省輿図・桐廬県右」「陸軍図・分水県治」「陸軍五十万図・廣信」に、焦山・焦山荘があり、BD・GEにも焦山が見える。

○舊縣 今も同名。桐廬県城の内の、旧市街なのだろう。

### ●口語訳

《8》桐廬を経て蘭溪へ

〔五日〕

鶏が二度目に時を告げる頃、召使いを起こし食事を作らせる。食事ができると、自宅に帰っていた担夫もやって来た。ところが、これまでずっと随行していた王二という担夫は逃亡してしまっていた。

朝食ののち、あれこれ手を尽くして他の担夫を捜し求め、ずいぶん時間を費やしてからやっと出発する。

南に二里で、馬嶺を上る。一里ばかりで峠に達する。この嶺以北は新城県に属する。川の水も新城県へ流れる。馬嶺の南は於潜県である。県城はここから西北五十里の地にある。川の水は於潜埠から分水県に流れる。

〔浙江杭州府於潜県域〕

馬嶺を下り、南に二里で内楮村塢である。

また一里で外楮村塢である。ここから南は家々は楮を生業としている。

山塢に沿って西南に七里進み、兌口橋を過ぎる。岐路が南北に分かれている。北は於潜県に達する。四十里くらいだろう。南は於潜埠に至る。十八里である。兌口橋を流れる水は、北の於潜県から流れてきて、馬嶺の水は東から流れてきて、ここで合流して南に流れる。道もこの流れに沿う。

八里で板橋を過ぎる。橋の下を流れる水は西の塢から来て、前面の川と合流する。この川を遡って西に行けば、その道は於潜県から昌化県に達する。

また南に五里進むと保安坪である。

また一里で玉潤橋である。「自注一」ここで山がおおいに開けた。

また東に二里で、唐家拱で停留する。この地は於潜埠の北二里にある。もとよりここには市や店はない。担夫が言うには、於潜埠から桐廬に下る船は、北へまがってここを通るとのこと。そこで溪流の岸に停留したのである。しばらくすると桐廬への船に出会えた。

思うに於潜埠は於潜県の南の端で、川の南はもう分水県である。於潜県の川が北の方から玉潤橋を経由して（南下し）、昌化県の川が西の麻汊埠より流れてきて、どちらも於潜埠で合流する。かくしてここで水勢が盛んになるのである。しかし玉潤橋より上流は（水量が少なく）船を浮かべるのに耐えない。一方麻汊埠より上流は、小舟でそのまま昌化県に遡れる。於潜県の川は昌化県のそれには及ばないのである。

時に太陽が既に南中しているが、食材を買い求める店がない。（少し上流の）於潜埠で買い求めたいと思ったが、船は待つてくれない。そこで（食材はあきらめ昼食抜きとし）船とともに行くこととした。

船に乗り、東南に十里進むと、嚴州府の分水県である。

〔杭州嚴州府分水県域〕

県城は川の西岸にある。分水県の地は、川は東南に流れる一水があるのみである。県城の西は山は開けてはいるものの、陸路だけであり、八十里で淳安県に達する。私ははじめはこの道をたどろうと思っていたのだが、召使い（担夫）の王が逃げてしまったため、陸行は不便である。そこでやむなく水行を選び、逆の方向の東南へと進む。

分水県を東南に二十里で頭鋪である。

〔浙江嚴州府桐廬県域〕

また十里で焦山である。店舗や市場が賑やかである。已に日が暮れたが、食材を買うことができない。そこで水主の残りを借り、飯を炊く。

水主は流れに沿って夜も櫂をこぐ。

五十里で桐廬県の旧県に達する。夜も半ばを過ぎていた。

◆旧県に泊。

「自注1」橋はとても新しく、まちも賑やかである。この橋はまた排石橋とも言う。

(第二部へ続く)

訳注…薄井俊二、二〇一二年三月三十一日\*

修正補足…薄井俊二、二〇一三年五月五日

\*口語訳と簡単な注を「徐霞客遊記」訳注稿 西南遊記篇(その一)―「浙遊日記(前半)」―(『埼玉大学紀要(教育学部)』第六一卷第二号、二〇一二年)に掲載。